

展覧会について

木々の枝の間から差し込む光、それらはさまざまな表情を見せる。そしてさまざまな響きを奏でる。ときには優しく、あるいは猥雑に、ときには激しく、ときには狂おしく、そして蠱惑的に。もちろん、それらを見、聞き、思考する以前に、何にも代え難い、名状し難い感覚が訪れる時がある。

おそらく、この感覚と思考を瞬時に一体化させ、新たな音を紡ぎ出す能力に、佐野陽一は長けているのだろう。密やかな力強さを持ち合わせている彼の写真の魅力の一つはそこにある。彼方にある世界、それを明らかにする光。移ろいゆくその光はまた、移ろいゆく空気をも暴き出す。それに触れた時の一瞬の眩暈（めまい）。それらもまた彼の表現の中に表される。それは、かつてあった彼の感覚と、目ではあるが、現在と結ばれて新たな意味と、世界を獲得していく。

人は誕生して目を開けた時、何も知らず、何も考えず、まばゆい光の中に投げ出される。まばゆいという言葉も知らずに。彼の目はその無垢な状態に近くあるようなのかもしれない。

岡村多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家